

疲れたら、ひとやすみ、うとうと・・・ゆるやかな時間を大切に。

※書籍右横の番号はセンターでの検索番号です。



### からゆきさん

1976年 朝日新聞社  
森崎和江 (著)

[1100-3]

幼いころ、天草から東京のみせもの小屋に売られたキミは16歳で再び売られ、異国の男たちを身体で慰める「からゆき」となった。人としての誇りを打ち砕かれ、日夜課せられる過酷な労働。癒えることなき傷を心身に重ねながらただ生き続け、老いて精神を病んだ。

本書はキミの養女を介して「からゆき」を知った著者が、当時の社会情勢や地域の風習を丹念に調査し、明治から昭和にかけての「売られた女たち」の軌跡を辿ったノンフィクションである。初刊から40年以上が経過した今も読み継がれる名作を、どうぞ。(みっと)



### 裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち

2017年 太田出版  
上間陽子 (著)

[1100-3]

家族の虐待から逃れるために、命がけで家を飛び出す少女。夫や恋人からの暴力支配に、自身の存在価値を見失う少女。彼女たちは今を生きるために、夜の街に向かった。少女たちの悲惨な姿を通して、貧苦がもたらす根深い闇が明らかになっていく。著者は絶望の記録だけではなく、一人ひとりがその折々を必死で生き抜く「力強さ」も紹介している。夜の仕事の衣装を靴につめて通学し、生活費を稼ぎ、脳性麻痺の子どもを育てながら看護師となった若き母の章は、苦しむ女性への励ましに、きつとなるだろう。(みっと)



### ハッピーバースデー

2005年 金の星社  
青木和雄、吉富多美 (著)

[1200-2]

11歳の少女あすかが、母親から「おまえ、生まれてこなきゃよかったよな」と言われるところから始まる。兄の直人は可愛がって、妹にはつらく当たる母静代。

傷ついたあすかを優しく受け入れてくれた祖父母の下で、自信と勇気を取り戻していく。

その後、学校でいじめに遭っている友を助けるなど、あすかが周りの人をも変えていく大切な存在になる。

家族や友達、学校の先生などがリアルに描写され、移りゆく展開の中で、人との繋がりの大切さ、思いやり、言葉の力などに気づかされます。(かかし)



### 寂しい生活

2017年 東洋経済新報社  
稲垣えみ子 (著)

[1200-3]

原発事故をきっかけに「個人的脱原発計画」を思い立ち、電気代半減を始めた著者。しかし、達成は難しい。発想の転換と、ついに全減を目指し始める。冷蔵庫まで捨て、やがて行き着いたのは「今を生きる」境地！それなのに、ひょんなことから都心のオール電化マンションに転居、またまた難題に取り組む。

軽妙な筆致で気軽に笑いながら読めるが、「便利」と引替えに失った大切なものも思い出させてくれる。

読み終える頃には、クーラーを切って外の木陰で本を読みたくなるかも…。(ルナ)